

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2191500046		
法人名	株式会社 やさか		
事業所名	グループホーム あんき		
所在地	岐阜県中津川市坂下931-1		
自己評価作成日	令和4年1月11日	評価結果市町村受理日	令和4年4月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kairokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2191500046-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター びーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	令和4年3月16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域の方々と連携をはかりながら「その人らしい暮らしをその人が主役で作れるケア」を理念に、職員の業務上の役割を極力決めず、その日のその人の動き、要望に合わせた支援を、柔軟に出来るように取り組んでいます。地域密着サービスと言う事を大切に、地域の方との交流を行っています。コロナ禍で交流が難しくなり、ホーム外での関わりが少なくなり、ホーム内での支援が多くなっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は国道256号線沿いにあり、周辺には駅や病院、ショッピングセンター、道の駅も近い。恵那山が見え、自然環境豊かな場所でもある。開設当初は運営が株式会社というだけで、地域の理解を得ることが困難であったが、今は高校講師や実習生の受け入れ、地域交流も活発に行っている。コロナ禍の今、様々な活動に制限はあるが、行政委託の介護予防事業を継続し、介護相談の窓口的役割を担っており、住民にとって頼りになる存在となっている。管理者は、ケアの理念「その人らしい暮らしを、その人が主役で作れるケア」を全職員に周知し、コロナ禍にあっても、工夫をしながら出来ることを行い、より良い支援に繋げている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目: 23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができて (参考項目: 9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目: 18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目: 2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目: 38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目: 4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目: 36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目: 11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目: 49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目: 30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目: 28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念に基づいた支援ができるよう、日々の申し送りや職員会議での話し合いを行っている。	理念は、誰もが分かり易い文言になっており、玄関先に掲示し、毎月の職員会議で確認している。職員は、利用者が地域と関わりながら、その人らしく生き生きと暮らせるよう支援し、理念の実践に繋がっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍での地域の関わり方に苦慮している。それでも地域の方が、野菜や切れ布など色々な物を寄付して下さり、声を掛けて下さるなど、地域の一員として認められているのではないかと感じている。	地域行事が中止となり、住民との交流が出来ていない状況にあるが、野菜の差し入れや物品の寄付等もあり、個人的なつきあいは途絶えていない。収束後には、事業所主催の夏祭り、流しそうめん等の行事再開や、公民館での歌声サロン参加を予定している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方の相談などは伺っており、事業所への利用へとつながるケースもある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍の影響で、運営推進会議が開催できておらず、報告のみで終わっている。コロナ禍での開催や関わりをどうしたら良いか模索中です。	隣接の小規模多機能ホームと合同で隔月開催している運営推進会議は、行政の助言を得て書面報告としている。運営状況や活動報告、職員不足の現状等を参加メンバーに送付し、意見や要望を聞いている。介護相談の窓口的役割も担っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	グループホーム部会の開催は少ないが、開催時には市の方との情報交換をしている。コロナ禍により以前ほどの関わりはできていない。	運営推進会議や市主催の研修会、部会等で行政担当者と情報交換をしていたが、現在は会議や研修が中止となり、直接会う機会は減っている。電話やメールで頻繁にやり取りしながら、新型コロナ抜き打ち検査等にも協力している。行政委託の介護予防事業も継続している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正委員会での話し合いを通して、日頃のケアに関して、その都度、その事例が身体拘束に当たるのでは？と話し合い、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束適正化委員会は運営推進会議の中で実施し、毎月の職員会議でも話し合いながら、拘束について学んでいる。ヒヤリハット事例や事故報告から原因の分析をした上で、サイドレール、センサーマット使用状況、利用者の外出願望等についても話し合い、拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束について話し合う場面から、高齢者虐待についても話し合う場を持ち、防止に努めている。		

岐阜県 グループホームあんき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年度は、権利擁護等の研修がなく、参加できていません。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所前に話し合う時間を作り、疑問や不安などを伺うように心掛けています。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者様の意見等は、日々の関わりから聞くよう心掛けています。ご家族には、コロナ禍で面会機会が減っているが、面会時などに伺うようにしている。	毎月、家族に郵送する「あんき便り」では、面会や外出の対応についての案内をし、個々の様子や利用者が発した会話内容、健康状態を記載し、複数の写真も載せている。コロナ禍で面会制限はあるが、便りを届けることで家族との意思疎通が図りやすく、意見や要望を運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回の職員会議で聴く時間を作っている。その都度話ができれば、聞くようにもしている。	毎月の職員会議では、職員から気づきや提案を出してもらい、コロナ禍にあっても、利用者が楽しめる支援方法について話し合っている。管理者も現場のシフトに入り、職員の意見を把握しながら、共に働きやすい職場環境づくりに取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	要望などを聞いたり、職員が働きやすい環境作りを心掛けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で研修事業が激減し、施設内でのケアの振り返り等を心掛けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナの影響で、回数が減っている。必要な話し合いなどは電話連絡等で行うことが多い。開催される会議などには参加できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人の不安へのアプローチに心掛け、安心できるような関係の構築に重きを置いて行うようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	十分に話す時間、聞く時間を作るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人の出来る事、出来ない事を探り、把握できるように努めている。出来る限り、自分で出来ることは自分で出来るようにと心掛けている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に暮らしている一員としてとらえ、支援が一方向的にならないように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	サービス導入前から、ご家族の協力は、ご本人の生活を支えるためにはとても大切である事を伝え、面会・受診など、可能な限り関わって頂くようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	可能な限り途切れないようにしているが、コロナ禍ではご家族のみの関係支援しかできていない。	以前は、家族や親戚の来訪、公民館で開催される歌声サロンへの参加等で、知人や近隣の顔なじみの人に会える機会も多かったが、コロナ禍の今は中止となり、面会は限られた家族のみとなっている。感染予防対策をした上で、ドライブを兼ねて馴染みの場所へは行くようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が間に入りながら、お互いが支え合えるような関係性が出来るように橋渡しをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス契約終了時には、いつでも相談にのる事を伝えてはいるが、相談や支援に至ったケースはない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人の思いや願いをなるべく叶えられるように支援している。思いを伝える事が困難な方には、ご本人の以前の意向を参考にしながら支援するようにしている。	職員は、事前に利用者の生活歴等の情報等から、思いを推測したり、日々の関わりの中で、本人が望む暮らし方や意向を把握するよう心がけている。言葉に出せない思いや意思疎通が困難な人は、表情や反応で汲み取り、その人らしい暮らしの支援を検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前後にご本人、ご家族を通して情報収集を行うように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その人がどんな生活を望んでいるのかなど情報を集めながら、ご本人の出来る事を大切に支援出来るようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	モニタリングや職員会議などを通して、ご本人の思いを元に、よりよい生活が送れるように介護計画へと繋げている。	ケアマネジャーも現場に入っており、利用者の状態を把握しながら、家族の来訪時に意見や要望を聞くようにしている。サービス担当者会議で職員の意見を集約し、本人と家族が発した言葉も、そのまま計画の意向欄に記載している。援助内容も具体的に記述し、本人の目標達成に繋げやすくなっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録(個別記録)を作り、個人の状態、思いや気づきなど、情報の共有が出来るようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人の思い、その時の状況に出来る限り対応できるような体制作りをしている。		

岐阜県 グループホームあんき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の把握には努めているが、コロナ禍でどう活用しながら、ご本人のより良い生活に繋げていくのか模索している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	可能であれば、今までかかっていた医師に主治医として関わって頂くようにしています。入所後は、書類など作って状態報告などを行うようにしています。	従前のかかりつけ医を継続することができ、通院は家族が担い、要望があれば職員が代行している。訪問看護も週1回受けながら、健康状態の把握や指導、必要な情報をおかかりつけ医に報告している。緊急時には、医療機関と連携し、利用者が適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週一回の訪問看護師に相談など行っている。必要な場合は、その都度連絡して、指導・指示をしてもらうようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には情報提供表を作成し、入院先に提供し、退院時にはサマリーや直接状態確認など行い、スムーズな支援に繋げるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	早い段階での細かな話し合いは行っていない。ご本人の状態にもよるが、入所されてから、徐々に時間を掛けて話し合うようにしている。	契約時に本人・家族に事業所の方針を説明し、同意を得ている。重度化のレベルに応じて、その都度、主治医の判断や家族の意向を確認し支援をしている。職員は、看取りの知識や経験に乏しく、不安を持っていたが、コロナ禍で看取りの実施があり、知識や技術、利用者と家族へのサポートについて学び、振り返りを行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	実践力とまでは言えないが、初期対応ができるよう話し合いは行っている。看取りも行った為、参考にしながら振り返りができる様にしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練では、近所の方の協力が得られていたが、コロナ禍で、参加をしてもらえなくなり、今まで積み上げて事ができなくなるのではないかと不安を感じている。	年2回の災害訓練を実施し、1回は消防署協力の下で夜間の火災を想定して行っている。コロナ禍での地域住民の参加や協力は難しく、話し合いの機会も持っていない。隣接施設との協力体制が出来ているが、地震や停電時の対応は未着手となっている。	コロナ禍での避難については、行政と十分話し合いながら、災害の種類に応じた備蓄の確保を検討されることが望ましい。地域住民との協力関係は、これまでのつながりを継続し、収束後には更に連携しながら、災害対策の強化に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人の人として、人生の大先輩として尊重をしながらの支援を心掛けている。支援する側が、上の立場になってしまわない様、日々の申し送りや、職員会議で話をしている。	職員は、常に笑顔で利用者と接し、言葉遣いや対応も基本を忘れない支援を心掛けている。利用者一人ひとりの性格や習慣を職員間で共有し、無理強いすることなく、本人の自己決定を尊重している。また、家族に向けての言葉遣いも、誤解を招く表現とならないよう、常に意識し全職員で資質向上に取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	普段の会話から、希望・要望を伺い、出来る限りご自身で決定して頂く様にしている。ご自分で選択出来ない方には、情報収集した内容から推測しながら行うよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務上の役割を極力省き、利用者が中心となるよう、また一人一人のペースに合わせた支援を目指すようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご本人の意向に合わせた支援を行っている。以前行っていたことが継続して出来るようにも心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	地域に根差した行事食(季節食)の提供は、懐かしみを感じながら、また好きな物が食べられるような食事を提供するようにしている。一緒に行う事も心掛けながら行っている。	副食は隣接の小規模多機能ホームから運ばれ、ご飯と汁物は職員が用意している。利用者も、盛り付けやテーブル拭きを手伝っていたが、今は感染対策の為、控えている。里芋を収穫して芋煮会をしたり、朴葉寿司作り、誕生日ケーキの提供などは継続し、食べる楽しみにつなげている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人一人に合った食事の提供量。水分の摂取量も意識しながら、少ない方には飲み物を工夫する事も行っています。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食行う方もいれば、しない方もいます。こちらでの支援が必要な方には、夕食後に必ず行うようにしています。		

岐阜県 グループホームあんき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トレイでの排泄を心掛けています。一人一人の排泄パターンを見ながら、トイレ誘導を行うようにしている。	排泄支援については、自立に近い人、一部支援、全介助の利用者等、個々の排泄状態に合わせて声掛け、誘導を行い、トイレでの排泄につなげている。時には誘導を拒否する人もあるが、無理強いを避け、タイミングを見計らいながら支援している。夜間はポータブルトイレ使用や適切な排泄用品で対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝、自家製ヨーグルトの摂取。適度な運動ができるように心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	概ね、その日に入る人を決めてはいるが、その日のその人の気分によって時間をずらしたり、後日に変更したりと、楽しみになるよう、個々に応じた支援をしている。	週2回の入浴を基本としているが、回数や曜日の変更にも柔軟に対応している。高野槇の個浴槽で、ゆったりと気持ちよく入浴できるよう支援している。重度者対応のリフト設置を検討したが、スペース的に難しく、隣接の小規模隊機能ホームの機械浴利用で対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々のペース、状態も見ながら休む時間を作っている。より良い睡眠の為に、日中の運動や体操等も行えるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の目的を理解できるように、商法船など見てもらおうようにしている。副作用までは、理解できていないが、それぞれの用法・容量を守るようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	役割などは出来る方には、一緒に行って頂くようにしている。嗜好品などは、希望される方のみとなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	週に1度のドライブは出来る限り行っている。以前は喫茶・外食も行っていたが、コロナ禍で、外出のみとなっている。	以前は、家族や職員と一緒に、買い物や喫茶店に出掛けていたが、現在は自粛し、事業所周辺の散歩に留めている。毎週木曜日の外出行事は継続し、ドライブを兼ねて出かけ、恵那山や街並みを車窓から眺めながら、利用者の気分転換を図っている。	

岐阜県 グループホームあんき

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っている方もいるが、持っている事を忘れる方が増えており、個人で使う事はない。こちらでの立て替えが多くなっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望が有ればいつでも出来るようにはしている。年賀状は全員が送れるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	安心して生活できる場、暮らしやすい環境になるようにしている。季節を感じられるような展示等も出来るようにしている。	感染予防対策の為、廊下からの見学とした。共用空間の天井は高く開放感がある。テレビの前にはゆったりとしたソファが置かれ、寛げる場所になっている。キッチン是对面式で、職員が利用者の様子を見守りながら作業ができる。ベランダも広く、洗濯干し場でもあり、家庭的で居心地よい雰囲気が感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ご自身の居たい場所にいられるようにしている。共用の空間では一人になる事は難しいが、お部屋に行ったりと、思い思いに過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅にあった使い慣れたもの、思い入れのあるものを持って来て頂き、ご本人の居心地の良い空間になるようにしている。	居室には洗面台とロッカー、ベッドを設置している。利用者は馴染みの寝具や家具類を持ち込み、使い易く配置している。排泄用品や季節外の物はロッカーに収納し、本人が自分らしく落ち着いて過ごせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	可能な限り自分で出来るよう、分かり易い環境になるように努めている。		